342 狭心症1枝病変における虚血の重症度評価－Circumferential profile analysisによる定量解析を用いて－

下永田剛，西村恒彦，植原敏勇，林田孝平，
高宮　誠（国循セン，放）
斉藤宗靖，住吉徹哉（同，内）

運動負荷心筋スキャンを狭心症1枝病変52例に施行、Circumferential profile analysisを用い、心筋虚血の定量評価を行ない、負荷心電図、胸痛、冠動脈所見と対比した。

運動負荷心筋スキャンは自転車エルゴメータを用いた漸増負荷法とし、再分布、負荷時のCircumferential profile curveで囲まれた面積をischemic scoreとし、また、両者の比からwashout rateを算出した。左前下行枝病変34例、右冠動脈病変9例、左回施枝病変9例における心電図、負荷心筋スキャンの陽性率はそれぞれ（62%，79%）、（56%67%）、（56%，56%）であった。Ischemic scoreおよびwashout rateは虚血の重症度と相関し、負荷心電図、胸痛などと併せ、本症の重症度評価に有用である事が示された。

343 Tℓ-201運動負荷心筋シンチグラフィーによる冠側副血行路の意義の検討

加納康至，大森好晃，大西正孝，森　孝夫，
塩谷英之，藤谷和大，福崎　恒（神大第一内科）
前田和美（神大医療技術短期大学部）

冠側副血行の意義を明らかにする目的で、血流を冠側副血行に全面的に依存する冠動脈の完全閉塞下領域についてTℓ動態を解析した。対象は冠動脈に完全閉塞を有し、その灌流域に虚血部が存在する労作性狭心症23例で、冠側副血行の発達程度により良好なⅠ群（n=13）と不良なⅡ群（n=10）に分類した。方法は既報のTℓ2回分注運動－NTG負荷法で行い、運動負荷直後（Ex 1像）、20分後（Ex 2像）、NTG像の各Imageで関心領域を設定し、正常心筋に対する相対比を求めた。

【結果】Ex 1像における相対比はⅠ群75.8±3.5%Ⅱ群77.2±2.9%でありNTG像ではⅠ群97.3±3.1%Ⅱ群96.4±5.2%と両群間に差は認められず両群は同程度の虚血を有すると考えられた。しかしEx 2像ではⅠ群85.3±4.7%に対しⅡ群79.3±3.9%と有意にⅠ群が高く（$p<0.005$）、またNTG像に対するEx 2像での回復率はⅠ群45.8±19.7%、Ⅱ群12.4±10.1%とⅠ群で高値であった（$p<0.005$）。【結語】以上の結果より良好な冠側副血行は、虚血回復過程において虚血からの速やかな回復をもたらすことが示唆された。

344 運動負荷心筋スキャンによる前壁心筋梗塞（1枝病変）の重症度評価－とくに肺野^{201}Tl集積との関連について－

小林　満，西村恒彦，植原敏勇，林田孝平，
下永田剛（国循セン，放）
斉藤宗靖，住吉徹哉（同，内）

心筋梗塞（1枝病変）55例にて運動負荷心筋スキャンを施行、circumferential profile analysisにより梗塞の大きさ、虚血の程度を算出、とくに肺野タリウム集積との関連について検討した。再分布時、負荷時のcircumferential profile曲線で囲まれた面積をIschemic Score、再分布時にて正常曲線以下の値を示す割合をDefect Scoreとした。また、肺野タリウム活性は負荷時のイメージにて肺野心筋に関心領域を設定し、両者の比から算出、34%以上（＞M＋2SD）を異常とした。梗塞症例は、1)完全再分布、2)不完全再分布および3)再分布なしに分類できた。肺野タリウム活性は、1)、2)、3)において、Ischemic Scoreが大きいほど、またDefect Scoreが大きいほど高値を示した。したがって、心筋梗塞症例において、肺野タリウム活性の測定は、運動負荷心筋スキャンによる梗塞、虚血および心筋のViabilityの判定に加え本症の重症度評価に役立つことが示された。

345 1枝病変心筋梗塞症例における慢性期運動負荷心電図の対側性ST変化の検討

大窪利隆、片岡　一、高岡　茂、田淵博己、
中村一彦、橋本修治（鹿児島大　二内）

梗塞部の責任冠病変以外に、有意冠狭窄のない一枝病変の心筋梗塞症患者27例を対象として、慢性期に施行した運動負荷心電図の対側性ST変化の意義を負荷Tl—201心筋シンチグラム所見と対比し、検討した。前壁心筋梗塞症12例のうち、対側性ST変化の出現は3例（25%）で、全例水平型ST低下であつた。また下壁心筋梗塞症15例のうち、3例（20%）が水平型、3例（20%）が接合部型ST低下を呈した。下壁梗塞症例での対側性ST低下の出現頻度は前壁梗塞症例のそれに比べ、大なる傾向にあつた。次にST低下の有無と心筋シンチグラム上の虚血巣の拡がりとを対比した。前壁梗塞症例ではST低下を呈した症例の2/3例で虚血巣は後側壁に及んだのに対し、変化のない症例では同部位での虚血は認められなかつた。一方下壁梗塞症例では、対側性変化を呈した症例の6/9例で下部心室中隔、あるいは後側壁に及ぶ虚血がみられたが対側性変化のない症例では同部位の虚血は認められなかつた。以上より、一枝病変の心筋梗塞症例における対側性ST変化の出現は、梗塞巣の拡がりと密接に関連していることが示唆された。

Presented by Medical*Online